
朔の日、嘘、懺悔

月野魚

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

朔の日、嘘、憾悔

【Nコード】

N7110G

【作者名】

月野魚

【あらすじ】

朔の日にやって来た客人は、小さな子狐。化かされまいと疑いながらわたしは日々を過ごす。そして訪れた満月の晩、子狐の嘘、わたしの後悔。

(前書き)

ジャンル違ってたら、すいません。

ある朔の日の夜のこと。

風が竹の葉を撫でる、小雨のような音が耳に届きました。そうして濃くなる夜闇に不安を覚えたわたしは、髪を梳く手を止めました。障子戸を開けると冷たい秋風に身がすくみます。

月の無い、闇ばかりが転がる庭に目を遣ると、そこに小さな影一つ。わたしは思わず声を上げました。

まじまじ見ますと、闇に浮かぶは狐の面。

面の下から現れたあどけない顔を、わたしは、じ、と見つめました。

「今晩は」

暗黒の雲が夜空を隠し、僅かに灯った蠟燭の火が、縁側に現れた幼い少年の顔を橙に染めます。

流れる黒髪から覗くのは、月に似た黄金きんの、三角の耳。右耳に大きな傷が走るそれを見て、わたしは、ははあと思いました。

その傷のある耳は、庭にしかけられた罫に足をとられ、そのあまりの哀れさに、わたしが助けた狐のそれと同じでした。

何を思っただけで出たのでしょうか。その黄金に煌めく二つの耳を除けば、人の子と変わりはありません。未熟な化け方はまだ子狐だからなのでしょう。

何にせよ、狐は人を化かすもの。律儀に恩返しに来たと言つのでしょうか。いいえ、そんな話は後にも先にもないでしょう。

怪訝な顔をしてみれば、その狐は笑みをこぼし、ふわりと尻尾を

一振り。そうして言うことには、

「どうか、貴女の側で使って下さいまし。貴女の気の済むまで、働いて見せましょう」

満面の笑みを見せながらそう言うものですから、わたしは暫し口を閉ざしてしまいました。そして、わたしは思いました。きっと、自分を罫にかけたこの家の人間を化かしに来たのだと。幼い子供に姿を変え、仕返しをしに来たのだと。

化かされてはたまりません。わたしは狐の意を汲んだ素振りを見せ、様子を窺うことにしました。そして、頃合いになったら、こちらから化かしてやろうと。

わたしは、狐に化かされた人々の話をよく耳にしていたのです。

ある人は、良い温泉があるとわれ、どれ、一つ風呂とつかつたら、気が付くと温泉が肥溜めであったとか。

またある人は、峠まで荷物を運んだお礼にと小判を山ほど渡され、喜んで家に急ぎ帰ってみると、小判が全て土くれだったとか。

皆、美しい女人に化けた狐にやられたと口々に言います。それが一人や二人ではないので、この村では会う人会う人顔をつねり合つて、狐か狐でないか、いつも疑っていたのです。

眉に唾をつけると化かされない、というまじないも効果は定かではありませんが、藁にもすがる思い、人々は必死でした。

さて、あの朔の日から数日経って、子狐は未だにわたしの側にいるのでした。女中にまじってわたしのことや家のことをよく世話してくれるのです。

夫や女中には、この辺りの森から来たので迷い子だろう、と当たり障りのないことを言って、家に居候させていました。

二つの獣の耳は決して見えぬよう、わたし以外の人と会うときは、真白の生地に淡い桃色の花を散らした布を頭からかぶせていました。子狐は人なつくく愛想も良かったので、色々な人から気に入られました。

わたしはたいそう困りました。子狐の正体が悟られてしまうのではないかと、いつもそわそわしていました。人に見られぬように部屋に閉じ込めておくのも怪しまれるだろう、と思っ度々子狐を外に連れて出ていましたが、どうやら間違っていたようです。

見知った人と会う度、わたしの心は落ち着かなくなるのでした。子狐を帰せばそれでいいのですが、わたしはいつの間にか、わたしを慕って側を離れない子狐を愛らしく感じていたのです。

化かされる前に化かしてやろうというわたしの思いは、この頃、既に薄れていました。

わたしはただ、真白の布の下に隠した嘘が風に悟られぬよう、子狐を見張っていました。

そうしてわたしが悩み悩み過ごしていたある時、村人が狐に化かされたと走って行くのが見えました。

話を聞いて見ますと、その人が言うにはいつもと勝手が違う、つまり、女人に化けたあのやり方ではないとのことでした。

すすきを刈りに峠へ出かけ、その峠で少し休もうかと腰を下ろした所、小さな地藏がありまして、村人はお供えにと団子を一つ二つ

置きました。手を合わせて拝んでいますと、なんと地蔵が消えていたのです。

辺りを見回すと、すすきの中に黄金色の耳と尻尾が見え隠れしていたと言っています。

わたしは家に戻って、子狐を探しました。

夕日が差す畳の上に、あの真白い布が無造作に置いてあるばかりで、他には何の気配もありません。わたしは布を握りしめました。

そして、その布に愛らしく咲いた桃色の花を見ながら思いました。やはり、狐は人を化かすものだ。

子狐は、夕闇が迫っても帰って来ませんでした。

わたしは灯をつけることもなく静かに狐を待ちました。そして、まあるい月が辺りを黄金色の光で包み始めた頃、庭に小さな影が現れました。

影は、小さな少年　　に化けた、子狐でした。

わたしと目を合わさず、もじもじとした様子で後ろに手を組み、立っていました。

月の光に影が落ちた顔は、所々擦り切れていました。わたしは、確信しました。すすき野原で人を化かしたのは、やはりこの子なのだ。子狐の様子からも、それが窺い知れました。

口を開こうとした子狐は、すぐにそれを止めました。きっと、わたしの顔は憎悪と失望でひどく歪んでいたことでしょう。

「わたしはもう、あなたにご用はありません。もう、話すこともありません」

わたしは、冷淡な口調でそう言いました。しかし、わたしの信念はすぐに揺らぎました。

子狐の目から、ほろほろと水晶のようなしずくが溢れていたのです。わたしは、はっと、胸を押さえました。

子狐は齒を食いしばり、わたしの手から真白の布を引つたくるように取りました。そして、それを抱きしめ、わたしの前に立ち、丁寧^にに礼をして、

「左様なら。いつか助けて頂いたご恩、決して忘れません」

涙も拭わずそう言うと、子狐は竹林へ駆けていきました。

わたしは子狐の駆けていった方を暫く、ぼうつと見つめ、頭の中にいつまでも子狐の泣きはらした顔を巡らせていました。

黄金色の満月に導かれるように庭へ出ると、先ほど子狐が立っていた所に、何か落ちているのを見つけました。

青く澄んだ夜空のような、五裂の花弁。

山野へ散歩へ出たとき子狐に、わたしが好きだと言った桔梗の花でした。子狐はそれを覚えていたのでしょうか。

わたしは胸が一文字に裂かれるいちもんじような痛みを感じ、すぐさま竹林の中へ駆けていきました。けれど、そこには、墨のような暗闇しかありませんでした。

わたしはその後、峠で村人を化かした狐はすぐに捕らえられていたことを知りました。酷く太った狐だったといえます。

村人を化かしたのは、あの子狐ではなかったのです。

あの晩、子狐が頬につけた傷はすすき野原に行つたからではなく、山野に行つたからだといふ瞬間、わたしの頭の中に子狐の泣き顔が蘇つて来ました。

朔の日が来る度、わたしは障子戸を開けて外を見遣ります。

夜空に、あの愛らしい耳と同じ色をした黄金の月を探しながら、わたしは懺悔と共に歩いて行きます。

朔の日の月は、わたしの心の内で。

あの子の傷とそっくり同じ、綺麗な模様を走らせて煌めいていきます。

(後書き)

最後まで読んで下さって、嬉しく思います。

舞台、時代設定など曖昧なところはご想像にお任せします。すいません、適当で。

やっぱり一人の視点から書くのは難しいです。書ける人はすごいな
！。

自分では気づかないこともあるので、感想など書いてくださると嬉しいです。

次にまたお会いできたら、と思います。それでは。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7110g/>

朔の日、嘘、懺悔

2010年10月11日00時33分発行